

飛鳥・藤原地域出土の弓

—第75-15次、85次、115次、193・194次、201-1次

1 はじめに

近年、飛鳥・藤原地域では第193・194次調査や第201-1次調査で古墳時代のものとみられる丸木弓の出土が相次いだ（図183）。弓については、用材選択に偏りがあることが指摘されている¹⁾。本稿では、飛鳥・藤原地域出土の弓の未報告資料もあわせて、樹種同定の結果²⁾について報告する。

2 飛鳥・藤原地域出土の弓と樹種

古墳時代以前の弓

山田道 第193・194次調査（『紀要 2018』）で南区（194次）の古墳時代木質遺物出土集中部（SU4555）から、布留2式の土器、運搬具、刀鞘、刀形などとともに出土した（図183・184-1）。古墳時代前期の弓とみてよい。心持材の丸木弓で、腹側を面取りし、先端は肩状に削り出し、弭とする。腹側の面取り部分を中心に漆とみられる黒色塗膜が残り、弓幹には2ヵ所の樹皮巻が残る。樹種はイヌガヤである（図185-1）。

四分遺跡（藤原宮西方官衙南地区） 藤原宮第85次調査（『年報1998-II』）で、井戸（SE8818）から、木製鋤、石器などとともに出土した（図183・184-2）。共伴する弥生土器は中期後葉に属する。一方の端部の両側から削り込み、弭状に整えようとしたとみられる。それより下位には全面に細条の削りを施す。残存長29.6cm、最大径2.0cm。樹種はカヤである（図185-2）。

四分遺跡（藤原宮西南官衙地区） 第201-1次調査（『紀要2020』）で、斜行溝（SD11570）から古墳時代中・後期の土師器・須恵器、刀形・有頭棒の木製品とともに出土した（図183・184-3）。古墳時代中・後期の弓とみられる。心持材の丸木弓で、先端は肩状に削り出し、弭とする。残存する下半部には、細条の削りを施す。一部に樹皮を残す。残存長37.0cm、弓幹の最大径3.2cm。樹種はイヌガヤである（図185-3）。

古代の弓

藤原京右京七条一坊 藤原宮第75-15調査（『藤原概報26』）で、右京七条一坊西南坪の池状遺構（SX385）から、紡

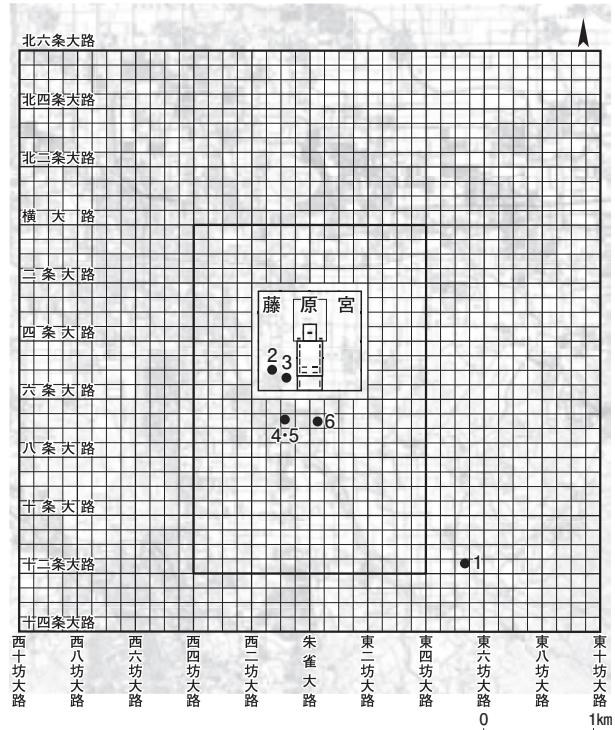


図183 飛鳥・藤原地域の弓出土地点

輪、匙形木製品などとともに、丸木弓1点、同未製品の可能性のある木製品が1点出土している（図183・184-4・5）。また、冶金・漆工関係遺物の出土から、北側に工房の存在が推定されている。共伴土器から藤原京期とみられる。4は心持材の丸木弓で、全面に漆を塗布し、先端は肩状に削り出し弭とする。残存長16.7cm、弓幹の最大径1.4cm。樹種はニシキギ属である（図185-4）。

5は丸木弓未製品の可能性のある丸棒で、先端を両側から削り出し弭状に整えようとしたとみられる。残存長26.6cm、最大径1.9cm。樹種はニシキギ属である（図185-4・5）。

藤原京左京七条一坊 第115次調査（『紀要 2002』）で、左京七条一坊西南坪の池状遺構（SX501）から弓が1点出土している（図183・184-6）。SX501からは多量の木簡、木製品、種実等の遺物が出土している。共伴する土器等から藤原京期のものとみられる。6は心去材の弓で、先端を肩状に削り出し、小さく弭とする。中位にはストロークの短い削りが施される。残存長28.9cm、弓幹の最大径1.9cm。樹種はカヤである（図185-6）。

3 まとめ

飛鳥・藤原地域出土の弓として確実な資料について樹種同定をおこなった結果、イヌガヤ、ニシキギ属の使用を確認できた。弓における一般的な用材選択と同じ傾向にあることが判明した。今後も樹種同定の蓄積を進める必要がある。

（片山健太郎／総社市）

註

- 1) 嶋倉巳三郎「古代日本の武器武具に使われた木」『末永先生米寿記念献呈論文集 坤』1985。
- 2) 樹種同定は（株）パレオ・ラボによる。

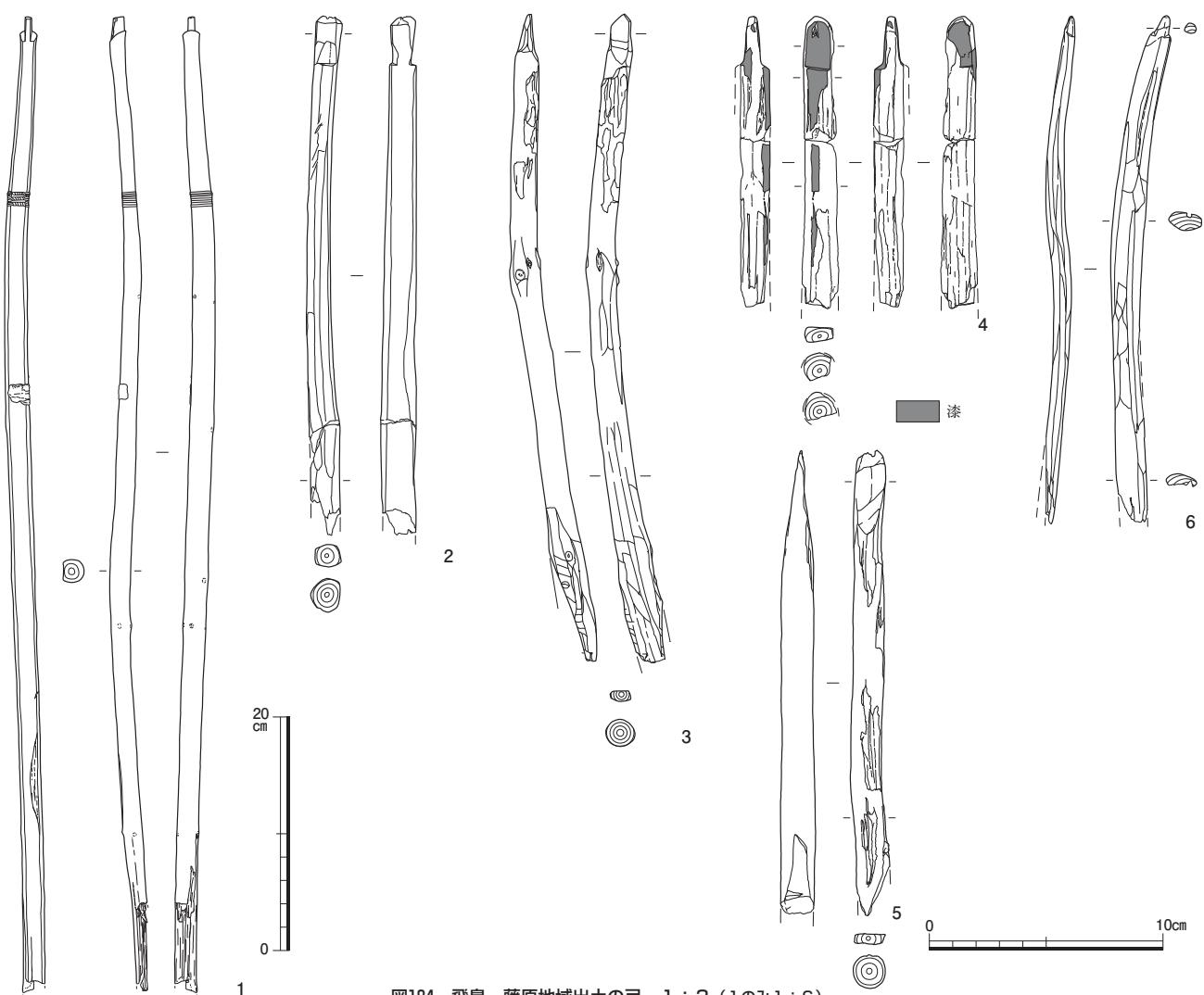


図184 飛鳥・藤原地域出土の弓 1:3 (1のみ1:6)

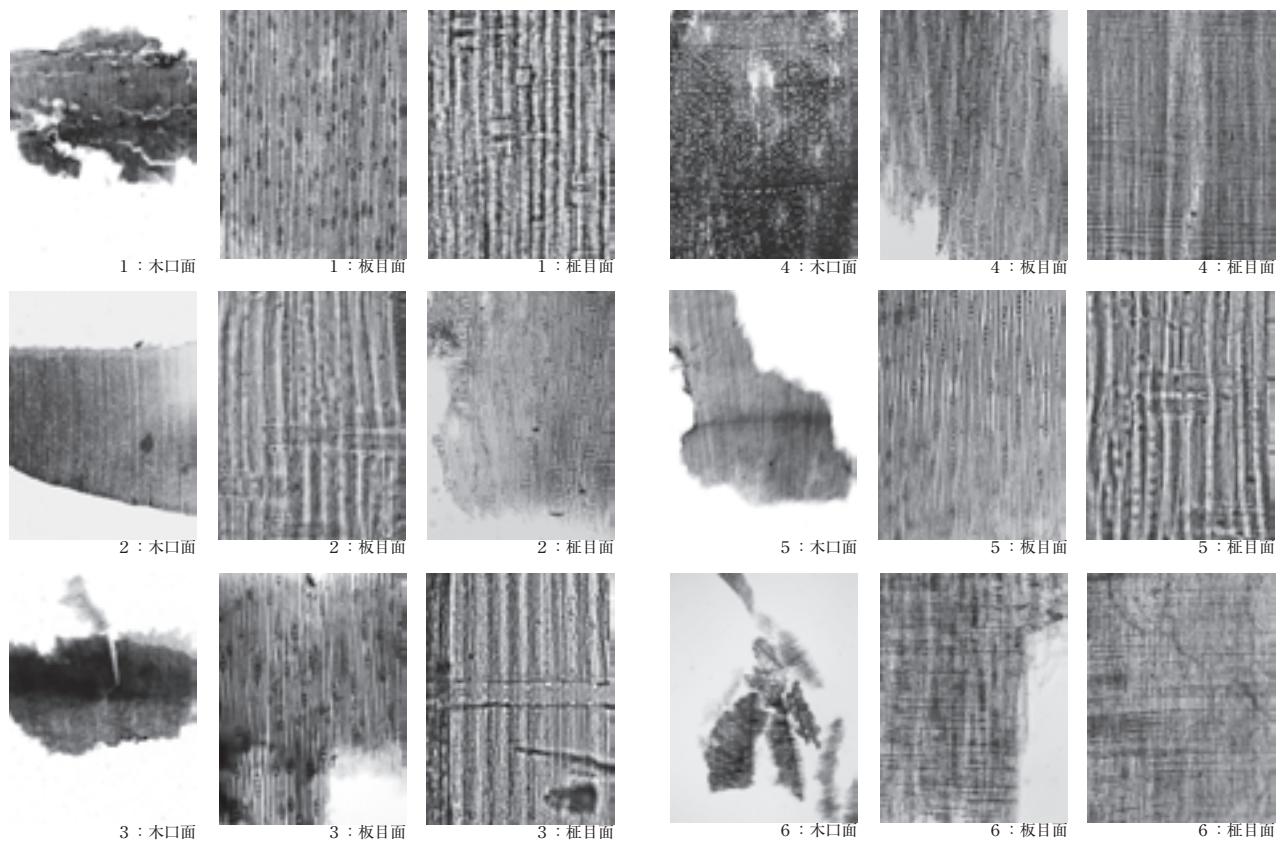


図185 飛鳥・藤原地域出土の弓の光学顕微鏡写真